

この間、足寄地区の螺湾及びトマム、更には芽登川流域にも事業を拡大したが、大正 14 年には主力事業地が美里別川本流と幌加川流域に統一集約され、昭和 56 年の不況期に一時中断された以外は沙流川流域と共に長く引き継がれ各年の伐採量は 12・3 万石を

下らなかった。

### 王子御三家

王子製紙の専属請負人として、坂本造材部、高谷造材部（当初は関造材部）中村組（後の菱中林業）の三社が「王子御三家」といわれた。

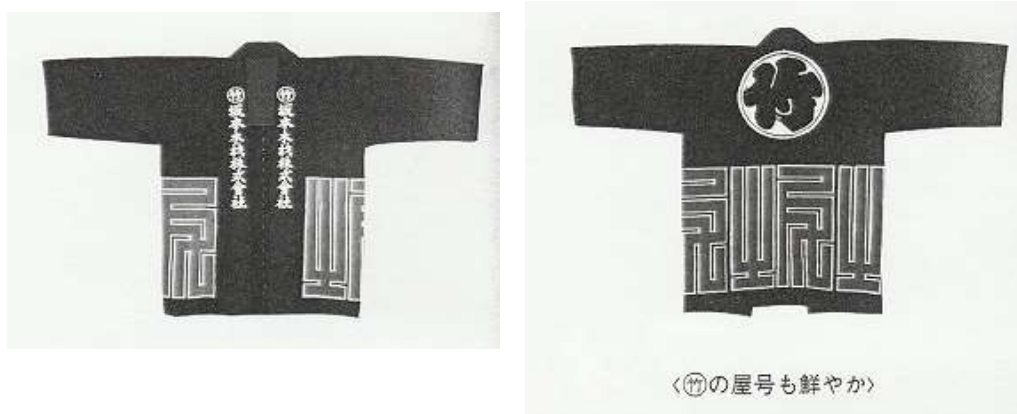
十勝地方では坂本造材部は陸別、足寄、美里別の各流域を高谷造材部は音更川流域、そして中村組は十勝川上流域を中心に事業を進めた。

大正年代の坂本造材部の十勝での仕事は王子製紙資料によると、前述の訓根別川で大正4年から9年まで年に6万石程度で40万4千石。（大正14年終了）美里別川大正3年から昭和25年まで、主に糠南地区の材を年間10万石程度で267万6千石を伐採流送したという記録があり、これらの材は本別網羽において陸揚げされた。

また大正13年から螺湾とトマム（何れも足寄地区）の2ヶ所を引受け昭和2年までこの仕事を続けた。

さらに大正12年から昭和4年まで芽登川で年平均10万石を流送し、大正の末には事業地を美里別川本流と幌加美里別川に絞ってからは、その扱ひ量は12・3万石を下らなかった。

美里別川の上芽登から喜登牛にかけては多くの人夫が働き、㊦の印半纏をまとった数は数百人に及んだという。



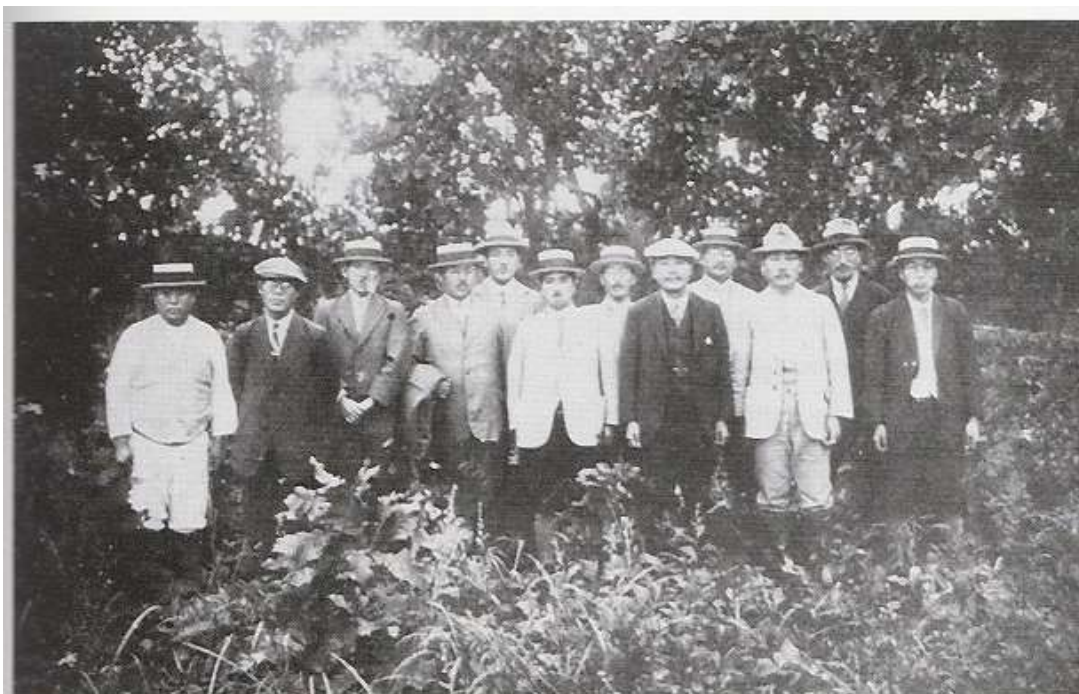
### 藤原銀次郎社長の視察を仰ぐ

我が国の製紙王として明治、大正、昭和の三代にわたって偉大な足跡を遺した藤原銀次郎氏が十勝の坂本造材部の現場視察に来られたのは、大正12年の夏であった。

藤原銀次郎氏は大王製紙興隆の礎を築き70才になって社長を退かれ、晩年日本を背負う大実業家として君臨し日支事変で統制経済が始まると商工大臣となり、その後も国務大臣や軍需大臣の重責に就かれた。

そのような身分の方が事業視察ということで二日間の日程で美里別の山奥まで来られ

るというのは、この時代では異例のことであり、現場は大忙しとなった。上士幌から芽登までは車馬で通るが、その先の美里別 90 林班までは杣夫径（そまふみち）しかなく、そのようなエライ方にお越しを願うのはとても無理な状況であった。当時の現場主任は、暴れん坊の異名をとった畑中重兵衛であったが、竹次郎の指示のもと現場員を総動員して道を広げ、沢筋には数千本にも及ぶ材を敷き詰めてお迎えし、翌日、竹次郎と重兵衛が先導のうえ丁重に現場をご案内したところ、藤原社長はいたく感心され、一同を集めて労を謝し社員には 3 円、労務者全員に 1 円の祝儀をだされたという。後年、竹次郎はもとより独立した重兵衛も死去するまでよく一生の感激としてこのことを語り継いだという。



大正12年、藤原銀次郎社長ほか随員一行は、十勝国美里別事業地管内を視察し、現場員の労をねぎらう

（左端  
坂本竹次郎）

（左端より三人目  
畑中重兵衛主任）

（右端より五人目  
藤原銀次郎社長）

### 風水害の被害と業務の縮小

大正 2 年から始まった夕張事業地の請負事業も大王製紙からの要請により大正 10 年で

撤退を余儀なくされた。

大正 8 年沙流川、鷓川の大増水で平取及び佐瑠太の網羽が切断という災害に見舞われ、流失材の一部は三陸海岸に達するという未曾有の被害を受けた。

大正 10 年商号を㊤坂本合名会社とする。

大正 12 年王子製紙藤原社長ご一行美里別事業地を視察。

大正 14 年には釧路の訓別川の流送より撤退した。

同年本店を南 11 条西 7 丁目に移転。

### 十勝の流送が一時中断

大正天皇がご崩御され年号が大正から昭和に移り変ると、金融恐慌がおこり世界中がどん底で喘ぐ世界恐慌へと進んで行った。

この頃こんな歌が飯場で聞こえ出したのである。『出がけ明けボシ、昼は梅ボシ、飯場帰りは流れボシ、ホシの旦那は赤えボシ、めんこい嫁ごは綿ボウシ、おいらは切りボシ、山での暮らし。雨っこつづけば涙をコボシ、腹と財布がついヒボシ』

美里別川での流送事業も不況のため、昭和 6 年と 7 年には一時中断せざるを得ないこととなった。

坂本の事業は苫小牧の近くの日高地区のみとなった。

昭和 10 年沙流川の増水で陸揚材が流失した。

昭和 12 年商号を㊤坂本木材部に変更（合名会社を解散し個人経営とした）

### 戦時下のもとの

昭和 14 年から木材需給調整で各都道府県に対して生産割り当てをし、さらに昭和 15 年 10 月に用材配給統制規則が交付された。

昭和 16 年王子製紙より造船材の発注があった。

昭和 18 年 9 月陸軍航空部から王子製紙に対し、木製飛行機製作の命令があり、王子航空機株式会社が設立されて江別工場では戦闘機を製作することとなった。

しかし、飛ぶにはガソリンに不自由をし勤労働員の学生や地元の婦女子による航空燃料代用の松根油生産が始まる状況であった。坂本木材部の伐採現場にも当然のことながら松根油生産の要請があった。

昭和 20 年 7 月 15 日米軍の艦載機により十勝地方の木材産出の中心ともいべき本別町が突然 50 分間にわたって何回も機関砲による地上掃射や空爆を受け、町は 3 日 3 晩燃え続け罹災者は 1 万人に達し、町は壊滅的に破壊された。

### 終戦を迎えて

昭和 20 年 8 月 15 日、終戦を迎え、日本経済も国民生活も惨憺たる荒廃の中にあった。山林現場に従事するものにとっては正に「国破れて山河あり」の感懐であった。

やがて GHQ によって木材の統制は解除されたが、国鉄はマヒ状態が続き、行き場のなくなった軍需用材がいたる土場にあふれ、新しく造材した材もその行き所を失う始末であった。

昭和 21 年 2 月 17 日、新旧通貨交換、預金払戻し制限を軸とする金融緊急処置例が交付された。

個人経営の坂本造材部にとっても事業用の金もなく、需要者の方にも自由に金が使えない状況になった。

昭和 22 年、国内では紙不足が深刻化していたので苫小牧工場では生産増加に進むことになった。それに伴い王子製紙及び関係林業団体、請負業者の業界一丸となって取り組んだのである。

こうした中、昭和 24 年 7 月 31 日王子製紙は GHQ の指令によって苫小牧製紙工場（苫小牧工場）、十条製紙（十条他ケイ工場）、本州製紙（江戸川他形工場）に分割され、原料調達部門である山林部も夫々に分割されることになった。

#### 坂本木材株式会社の創立

昭和 24 年 9 月坂本木材部も法人に改組し社員 51 名、資本金は 500 万円の「坂本木材株式会社」として発足した。

社長：坂本竹次郎

副社長：山下暁也

専務取締役：坂本弥市

取締役：後藤金七、

同 上：北野清一

監査役：池上精市

同 上：遠藤源治で発足した。

坂本竹次郎 78 才であった。

本社を札幌市南 12 条西 6 丁目において、新しくなった苫小牧製紙株式会社（その後王子製紙工業、王子製紙、新王子製紙と発展改称）苫小牧工場の専属請負人となる。

昭和 25 年には朝鮮動乱が勃発し、一般立木の競売価格は 7～8 倍に高騰した。

紙パルプ業界は思わぬ活況を呈していた。その景気の程は砂糖とセメントと紙で「三白景気」と称されるほどであった。

昭和 26 年には資本金を 650 万円に増資し、さらに王子製紙が春日井市に新工場を建設するについて王子製紙山林部からの要請をうけて内地での初めての伐出作業の拠点と

なる駐勤所を岐阜市に開設した。

昭和 26 年 3 月、日高、胆振を襲った季節外れの豪雨により沙流事業地の平取網羽の損壊と網羽下流材の流失事故を生じ修復の結果、大事には至らなかったが思わぬ痛手をうけた。

### 河川増水による被害

昭和 28 年 2 月末、道南一帯を襲った大暴風雨により沙流事業地、平取、富川両網羽は解けだした氷塊と洪水のため切断され、予想外の被害をうけたが、4 月には復旧し流送に支障なきを得たが、これもかなりの痛手をうけたのである。

### 流送事業が困難に

この頃沙流川では開発建設部の沿岸治水工事と架橋工事が次々と着工され、施行中のもも流送による被害防備のために多大な費用と慎重な対応をせまられる事態となった。十勝の美里別川においても、「活込」に発電用ダムの建設が始まり、流送材は同所に新設された排水トンネル内を流過することとなり、施設の防備のため芽登付近に調整網羽及びトンネル入口に誘導網羽を設置するなど、多大な費用とかなりの作業準備が必要となり流送の早期完遂はもはや至難となってきたのである。

このような事情もあり、王子製紙山林部は近い将来のことを考慮し、沙流川筋のトラック道新設の願い書を北海道庁に提出、さらにトラック作業道の新設願いを林野庁に提出して伐出材の陸送への転換を準備したのである。

### 風倒木被害の処理

昭和 29 年 5 月 9 日から 10 日にかけての暴雨風があり、また 9 月 26 日の 15 号台風によって青函連絡船の洞爺丸が沈没する海難事故が起きた。この暴雨風によって北海道各地で多くの被害を出し、森林の被害だけでも 5 月の暴風と 9 月の台風の被害を合わせて 9,660 万石 (2,688 万 m<sup>3</sup>) にのぼると発表されている。

この被害は北海道全体の森林面積の 14%に相当し、全蓄積の 4%、平年の北海道森林伐採量の 3.5 倍に相当するものであった。

王子製紙では従来伐採の事業地の計画を中止し、風倒木発生地域に業務を集中させ、降雪になれば倒木処理に支障があるため、降雪までには業務を完了させなければならない困難な状況でもあったと記録されている。

国有林が定めた「風倒木処理計画」は可能な限り短期間に処理を進めるというものであり、昭和 32 年にはほぼ完了したが、伐出搬出にあたった坂本木材にとっても労働力の増大につながる大問題であった。

陰の部分の苦労は食料の調達で、一升飯を平らげる造材作業員を満足させるためには並

大抵のことではなく不足する主食を補うため代用食の馬鈴薯、南瓜、豆類の他、塩鮭、塩鱒、塩ホッケ等を探し求めて奔走したという記録がある。

### 山林事業の機械化

これらの風倒木処理のため山林事業の機械化が推進され、風倒木処理のため大型集材機による鉄塔集材方式やトラクターが導入され一挙に機械化が進んだのである。

昭和 32 年には坂本木材では沙流事業地でチェンソーを初めて導入し造材業者間の注目を集めた。

### 流送事業の終焉

なお、道内の沿岸治水事業や発電用ダム建設が本格化してきたため、昭和 29 年をもって長年続いた沙流川、美里別川の本川流送は幕を閉じたのである。

### 巨星隕つ

昭和 35 年 2 月 16 日坂本竹次郎と共に始まり、終焉を迎えた流送事業の後を追うようにして、創業者で坂本木材社長の坂本竹次郎は 90 才の天寿を全うしその生涯を終えた。葬儀は東本願寺札幌別院で執り行われ葬儀委員長は王子製紙工業常務取締役の山本茂朗氏、僧侶 29 名による執儀という盛大なものであった。

### 巨星なき後の新体制

昭和 36 年 6 月の役員改選により竹次郎の後継として、副社長の山下暁也氏が代表取締役社長に就任した。

昭和 38 年 6 月山本相談役の急逝により新たに相談役として柴内幹也氏、事業管理の実務担当取締役として上野正雄氏を王子製紙から迎えている。

これを契機に王子製紙から多くの方が坂本木材の役員として経営に参画することになった。

### 新社屋への移転

昭和 39 年 8 月、坂本木材は本社を新設の不二サッシビル（札幌市南 1 条西 12 丁目 19 番地）6 階に移転した。

数十年住み慣れた先代社長の坂本竹次郎の邸宅併用事務所から、本社を近代的ビルに写すことは山下社長にとっても坂本木材を従来体質から脱却させて新時代への対応を積極的に進めることでもあったのである。

従業員に対する挨拶の中で「私が坂本木材に入社してから 50 有余年、正に激動の時代を迎えている。本州地区への進出も軌道に乗り、近代的な組織への改革を図り、製材工

場、チップ工場も軌道にのって今や堂々と中堅企業の仲間入りができている。  
この機会に本社、出張所間はもとより横の連絡をも一層密にして心機一転全力を揚げて  
事業に邁進して欲しい」と訓示した。

しかし国内経済は慢性的な不況状況を脱し切れておらず道内木材業界も不況であえいでいた。

昭和 39 年 9 月 26 日には坂本木材株式会社創立 15 周年記念式を行った。

昭和 40 年 5 月の臨時株主総会において、新代表取締役社長に柴内幹也氏（王子製紙参与、北日本製紙常務取締役兼坂本木材相談役）代表取締役専務に一条龍彦氏（王子製紙苦小牧工場主任調査役山林企画室長）の両氏が選出され、山下暁也前社長は取締役会長に退いた。

常務取締役：石川重義（事業担当）

同 上：池上清市（管理部担当）

取 締 役：鷺田芳雄（総務部担当）

同 上：坂本竹男（中部支店長）

常任監査役：坂本弥市

監 査 役：市村修平

昭和 42 年 5 月には山下暁也会長は相談役に退いた。

## 多角経営

昭和 42 年 12 月には多角経営の一環として坂本陸運を設立し、木材輸送の他一般貨物も扱えるよう専門運送会社として出発した。

昭和 43 年 11 月には坂本機工を設立し自社の林業機械及び貨物自動車の修理、一般車の整備点検、中古車の販売、保険業務取扱も行うと共に、日高町にガソリンスタンドの経営にも乗り出した。

昭和 45 年には中部支店を春日井工場に近い岐阜市に移転、さらに長野県豊田村に新チップ工場を開設すると共に長野出張所を同所に移転した。

46 年 4 月、前社長の山下暁也氏は、旅行先の名古屋市在住の長男（山下一氏、坂本木材専務取締役中部支店長）宅に於いて急逝した。

大正 2 年 11 月坂本木材に入店以来、常に坂本竹次郎の片腕となって主として日高地区事業の総責任者としてかつやく、竹次郎亡き後あとを継いで二代目社長となるなど約 60 年の永きにわたって坂本木材と共に歩んできた。享年 76 才であった。

昭和 54 年 6 月の株主総会では、坂本木材の新社長に加賀正司氏（王子製紙参与苦小牧工場長代理）が選出され、柴内前社長は相談役に退いた。

代表取締役社長 加賀正司



代表専務取締役 佐山敬一郎（業務全般並びに事業部長兼管理部長）

常務取締役 山下 一（中部事業担当中部支店長）

同 上 石川勘三（道内事業担当）

取締役 坂本竹男（関係会社兼総務担当）

同 上 蔵重 清（十勝出帳所長）

同 上 盛 清智（札幌出張所長）

監査役 竹橋欣司（王子製紙苫小牧工場長代理）

昭和 60 年 6 月の株主総会に於いて、社長ほか役員の更改があったのであるが、坂本姓の役員はこれ以降出てこないのである。

### 平成から現在まで

平成元年、昭和天皇が崩御され年号も平成と改められた、この年坂本木材株式会社は創立 40 周年を迎えた。

平成元年 5 月 26 日、齋藤社長以下道内各出帳所長及び中部支店の従業員代表、25 名が参加して札幌市芸術の森の正門前、有島武郎記念館前に 25 年生の「イチイの木」（別名おんこの木）20 本の植樹を行い、記念の石碑を建てて創立 40 周年を祝った。

平成 2 年と平成 6 年の株主総会で社長ほか役員の更改があり、平成 6 年には新社長に専務取締役であった増山邦彦氏が昇格就任した。

平成 5 年 10 月 1 日、親会社である王子製紙は神崎製紙と合併し、新王子製紙株式会社が発足した。

### 創業 100 周年に向けて

翌 6 年には「坂本木材創業百周年記念実行委員会」を発足させた。

そのメンバーに坂本達男氏が副事務居局長として名前を連ねている。

平成 7 年、坂本造材を創立以来、本年で 100 周年を迎え「坂本木材 100 年のあゆみ」～創業 100 周年記念史～を発刊した。

平成 10 年 10 月、神崎林業株式会社、坂本木材株式会社、株式会社北王と合併し、社名を**王子木材工業株式会社**に変更した。

合併により坂本木材株式会社の社名は無くなりましたが、坂本竹次郎が築いた北海道の林業界では永久不滅に語り継がれる歴史となっています。

そして平成 15 年 4 月王子木材工業株式会社と王子緑化株式会社が合併し、**王子木材緑化株式会社**が誕生し、現在に至っています。

### 第三章 流 送

#### 北海道山林史

流送について「北海道山林史」（北海道編纂兼発行者 昭和 28 年 3 月 31 日発行）では次のように書かれています。

河川の木材流送は古来本州でも盛んに行われていたが、特に北海道においては鉄道の開通遅く、且つ道路その他の交通機関も不備であり、又開拓も内陸地方にはなかなか進まなかった関係上、材木を利用するには河川流域で伐採し流送するより外なかった。

山師飛騨屋久兵衛等は既に流送により盛んに江差檜山、蝦夷檜山の開発に当たったのであった。

彼らは冬季伐採して河辺に集積し、春季融雪と共に“川流し”をしたもので、当時は目名川、トド川、厚澤部川、茂邊川等何れも水量豊富であったため運材は容易であった。厚澤部川の流送について次のように書かれている。『アッサブの川へたに出れば、檜の皮を綱により岸より岸にひきわたし、にきょう（こくわづるの事）というかつらをわくねて、つかりの如くつらね、おもきというものをつけてつなぎならべ、うきたる板のうえをを馬も人もしとしとふみ渡るこそ、水上より柚木くだせるをここに止めて筏にくみ海をわたして江差のみなとに至るといふ……』



江 差 地 方 の 「 堤 流 」

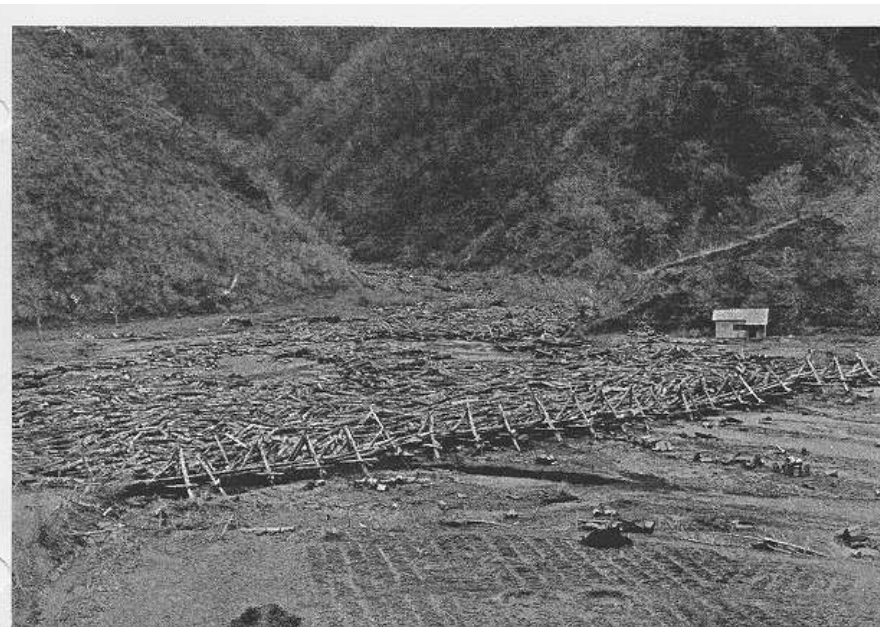
堤 の 寫 眞

本格的に流送が行われたのは、天塩川がその嚆矢であって、明治 33 年頃から開始された模様である。

天塩川は流域 77 里、10 支流、その間本願寺農場を始め多数の殖民地があり、盛んに森林を開墾していた。



木 材 管 流 状 況



江 差 地 方「網 羽」の 圖

(江 差 営 林 署)

元来天塩川は河口の水深も深く、川の内部も広く、帆船の出入りが容易であり、利尻、

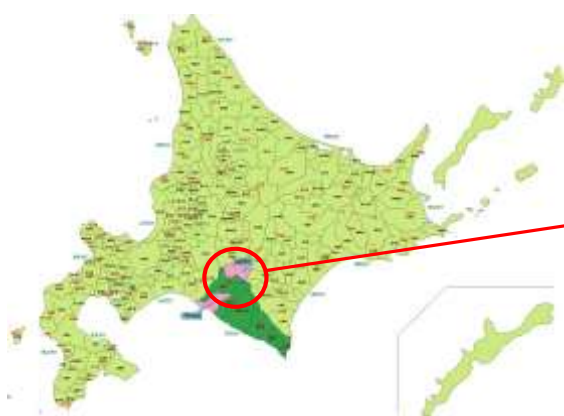
礼文等離島方面の漁場で必要なる薪炭の輸送のため多数の帆船出入りし、この流域から出された薪炭を輸送していたのであるが、これが木材積出しの手引きとなり、暫時流送が増加したのである。

現在流送するものは苫小牧製紙等のパルプ材が 70%を占める状況で、その主な水系は日高（沙流川）、胆振（鵒川）、十勝（十勝川上流・ピリベツ川）、釧路（白糠川）、北見（雄武川）、天塩（天塩川）等である。

現在流送の王座を占める苫小牧製紙会社は、沙流川、鵒川、十勝川上流、ピリベツ川、トクシベツ川を流送し、製紙原料の過半を流送で占めているが、その内 40 年の流送史を有し、本道としても代表的の場所である沙流、鵒川両河の流送についてその概要を述べよう。

同社は、沙流川は札幌坂本商店、鵒川は札幌高谷木材会社に請負わせて実行してきた。沙流川は富川を遡ること約 20 里の處から流送するが、“サル”とはアイヌ語の“悪い所”という意で、流送の難場といわれ、富川迄散流であったが、大正 10 年頃に至り平取、富川間を筏流することになり、戦後再びこの区間の散流が許可され、現在は全部散流である。

この流送に要する労務者は、両川共特殊熟練者を要するので、遠く富山、紀州、仙台、岐阜等より毎年雇入れ、そのうち船夫は富山の者が最も優秀にて特別優遇され、又それだけの貫録もあって毎年その年になれば羽織袴で堂々と乗込んできたといわれる。かくて流送は全く富山、紀州の衆に牛耳られ、現在でもこと流送にかけては本道人は問題にされない状態である。と逸話が記載されています。



日高町 HP より



日高町 HP より

## 新門別町史 中巻

### 第二節 森林の開発の項では

沙流地方における森林伐採事業は、元禄年間、飛騨屋久兵衛が松前藩に願い出て東蝦夷地の尻別で伐採事業を開始した後、当地方でも蝦夷樽（エゾマツ）の伐り出しを行い江戸、大阪に回送したといわれている。

北海道の森林伐採事業は明治期以降、移民の増加にともなう開墾地造成や木材需要の拡大等によって本格化するが、当町にあっても明治後期以降、森林伐採は著しく進んだ。明治 30 年代の沙流郡の状況は丘陵地帯は榲（かしわ）、赤楊（ハンノキ）、檜（ナラ）の三種が最も多く、河岸には榆（ニレ）、桂（カツラ）、赤楊（ハンノキ）で針葉樹は海岸より数里の奥でなければ見れない状況であった。

沙流川での流送の始まりは「王子製紙原料材の流送は、上流日高村は坂本組であったが、その以前富川は谷崎昆次郎の私営流送がある。

谷崎は自営木工場の用材にするため明治 37 年頃から下流沿岸から原木を買受けて流送していた。沙流川下流の散流川開きは谷崎を以て嚆矢とするといわれている。（日高村 50 年史）

沙流川の流送開きは谷崎がその最初であったという。

王子製紙による沙流川流域の造材事業を一手に担っていたのが坂本竹次郎であった。王子製紙は沙流では直営生産は行わず、原木の伐り出しから陸揚げまでの工程を専属請負人に請負わせる一河川一業者方式を取っていた。

坂本は石川県出身で明治 23 年に 20 才で渡道し、26 才の時札幌で造材業を営んだ。

以後、千歳御料林での請負、三井物産の造材下請などを経て、明治 42 年沙流国有林の木材伐出事業を王子製紙から請負、翌 43 年には同社の専属請負人となった。

明治末から大正初期の沙流事業地における造材石数は 43 年度 138,692 石、44 年度 219,638 石、45 年度 180,522 石、大正 2 年度には 245,856 石に達し、同事業地での伐出事業は極めて大規模のものであった。

戦後にあっても坂本木材は王子製紙の専属請負人として沙流川流域での伐出事業を継続し、大正 2 年から昭和 25 年までの沙流川流域での流送材積は 2,961,600 石に及んでいる。

流送作業に携わる流送夫は、沙流川では越中、津軽、南部、飛騨、十津川、紀州などから来るものが多かった。

作業は土入、堤流、そして散流・筏流しと続く。これらの作業に要する延べ人員、馬匹は陸揚材積 108,050 石で土入 2,286 人、堤流 3,659 人、散流 9,117 人、総勢 15,050 人、馬匹 470 頭」であった。（王子製紙山林事業史）

沙流川上流から散流で送られてきた材は平取の留網場で筏に組まれ、佐瑠太陸揚げ場ま

で流送される。

筏は原木（当初 14 尺であったが後に 12 尺になった）を結束して幅 2 間とするが、後方は 14 尺前後にして筏全体の形状を扇型（舟形）に仕上げる。長さは熟練者と未熟者によって桁数が異なり一定はしていないが、筏の材積は平均 70 から 80 石であった。筏には流送夫が乗込み操作をしながら流化するが、下流前方は熟練者、後方は日の浅い筏乗りがあっていた。

筏の流送回数流送夫の富川・平取間の移動が沙流軌道によっていたところは 1 日 1~2 回であったが、坂本木材が流送夫の同区間移動のため流送夫専用のバス導入後は 2~3 回に増加した。

しかし明治以降、木材運搬の主流であった流送も、道路網の整備に伴うトラック運材の普及等により沙流川本流の流送は昭和 28 年をもって終了したのである。

## 新門別町史 下巻

ここで流送に関わる専門用語がたびたび散見されています。この言葉を**新門別町史 下巻 第三節 林業**の中から転記します。

### 造材・搬出

木材の切り出しを造材といった。造材作業は木の伐採から搬出まで組織的に行われた。労働組織は一つの作業場に、山頭がおり、その下に小頭がいて実際の指揮をとった。この下に造材、ヤブ出し、搬出の作業毎にそれぞれ杣夫頭、人夫頭、馬夫頭がおり、その下に造材に携わる杣夫、ヤブ出しの道付け、木寄せ、搬出の馬夫の各作業員がいた。これらに必要な人員は杣夫 30 人、ヤブ出し 30 人、道付け雑用 20 人、馬夫 20~30 人、事務所 12 人位、炊夫 6 人で同規模の事業所が 3,4 か所あった。

造材に従事する人夫は山に小屋を建て生活した。小屋は職種毎に杣夫小屋や人夫小屋というように区別した。小屋は自分達で木を組んで作り、屋根は桁屋根とした。壁は笹を編んで壁にした。寝るところは笹を敷いてからムシロを敷き、小屋の中の暖房は巻きをサンに組んで火をたいた。

10 月中旬から人夫集めをおこなった。募集の手金（手付け金）をもって内地に行き親方に金を渡して人夫を集めた。

造材は 1 年で終了するような面積を選び、雪が降り始める 11 月から翌年 3 月 10 日~中旬ころの雪融け前に山仕事を終了させた。

### 伐採

伐採現場のことをヒラといった。ヒラはさらに採面（サイメンまたはトリメンという）に分けた。木の伐採はノコギリを使った手切りでヤマゴがこれ



に当たった。

造材はヒラを採面に分け、これをヤマゴに割り当てた。

採面は「何号採面」というように番号で呼ばれた。賃金の支払いは石数計算で月一回支払われた。これを計算する係を検尺夫といった。

作業は山頭の指示で動いた。ヤマゴの仕事は伐倒して枝を払い長さ 12 尺に玉切りするまでが仕事であった。

新しい山の仕事にかかるのを「採面開け（あけ）」といった。

その前日に集まって各々の「一番樹」をくじで決めた。

その日になればいつ仕事を始めても良いので晩の 12 時になれば飯場を飛び出して現場に向かい、早く一番樹を伐り、二番樹の権利を得るようにした。

良い樹を手掛けることは収入に大きく影響した。

## 搬出

ヒラで伐採した木材を運搬に便利な場所まで運搬することをヤブ出しといった。

木材が集められる場所を土場といい、ここで集積することを土場巻きといった。これらの仕事に従事するのをヤブ出し夫といい、トビロを使えることが必要であった。

道付は、鍬、スコップを使って道をつける仕事であるが、これは仕事がしやすく賃金も安くなった。

馬を使って搬出することを馬搬といった。馬搬は玉櫓（たまそり）の上に 7 本の丸太を積み、この上に立って馬に曳かせて搬出するもので、急斜面になると玉曳きの下にハドメを入れてブレーキにした。玉曳きで出すことを「ヤンチャ出し」といった。



ハビロ



トサツル



ドットコトビ



タマゾリ



ヨツ

ヨツ、バチバチなどは緩やかな所を遠い距離運搬するのに利用した。

川の水を利用して搬出するのを流送といった。流送は春の増水期を待って行うもので、川岸の大木にくくりつけたワイヤーを張り、これに厚い板を立てて川をせきとめた。これを網羽（アバ）とい



い、これを外して水の勢いで材木を下流に流し出した。

これを堤流しといい、流す木は軽い針葉樹で、広葉樹は重いので流さなかった。流送夫は越中、紀州から来た人が多かった。作業には流送トビを使用した。堤流しで沢

からはドレイ、土場巻きといって斜面を落として出した。流送の木材を上げる場所を水切り土場といった。ここではワイヤーを渡し、引っかかった木材を上げた。

水切り土場から陸（おか）土場まで馬で運び、その後鉄道で苫小牧まで運搬し、主に新聞用紙として使用された。

鉄道が開通する以前は土場から浜まで2里もの間に鉄場というものを引き馬に曳かせた。

浜からは本線まで筏に組んで引張り、本船に積み込んだ。搬出された木材はハシケで本船まで積み込んだ。

## 伐出事業とは

伐出に関する記事については「坂本木材 100 年のあゆみ」から転載します。

伐出事業というのは立木の伐採に始まり、造材、ヤブ出し、小運搬の各作業を経て流送地点（川土場）の土場巻立てに至る作業である。

当時は国有林の払下げを受けた王子製紙が伐採区域と伐採量を定め、坂本と請負契約を結ぶことから始まるのである。

この請負契約は極めて厳格なものであり、伐採量、伐採時期、請負金額等の基本的なことはもとより、各作業種別の仕様書及び検収方法等、細部に至るまで指示規定されており、その上万一の場合の危険負担と責任を課すために請負人に保証金を取るようになっていた。

資料によると、「大正中頃までは請負人に前渡金など出したことはなく、逆に保証金を取っていたので坂本、高谷等から苦情が出て、保証金を取らねば金利が浮き、請負金も低減できるということで、その後は保証金を取ることをやめた」と記されている。